

## 慈父にして厳父、あるいは「蝙蝠のポレミック」 ——代田智明先生を送る——

森 山 工

わたしが地域文化研究専攻で総務委員をつとめたのは、2008年度の後半期から2010年度(2011年3月まで)にかけて2年半のことでした。このうち、2009年度までは遠藤泰生専攻長のもとで総務委員をつとめ、2010年度の1年間を代田智明専攻長のもとでつとめました。

振り返っての記憶では、ずいぶんと長く専攻長としての代田先生にお仕えしたような気がしていますが、結局は1年であったことになります。ただ、その前の遠藤専攻長のときに、代田先生は専攻の研究科委員をつとめていらしたので、この間ほぼ毎週のように開かれる専攻四役会議(専攻長+2人の研究科委員+総務委員)を中心として、代田先生とはずっと密なやりとりをさせていただいていました。そのようなお付き合いの経緯から、本誌に代田先生をお送りすることばを書かせていただくことになりました。

このように総務委員として代田先生にお仕えしたなかで、わたしの印象にもっとも強く刻まれているのは、専攻内の人員配置の見直し、とりわけ教務補佐員のあり方に関する再検討の問題でありました。総務委員というのは、専攻内の庶務を担当すると同時に、専攻と各小地域の研究室とのインターフェイスともなる役どころであり、小地域の助教や教務補佐員とは密接に連絡をとりつつ、専攻の状況を彼ら彼女らに伝えたり、彼ら彼女らからの意見や要望を専攻に上げることを任務としています。そのような立場にあって、教務補佐員の配置を見直すということは、たいへんに心理的な負荷を要する任務であったと記憶しています。それをわたしの上役として主導されたのが、代田先生でありました。

人の配置にかかわることなので、ここで詳細を書くことは控えます。教務補佐員には多くの場合、博士課程を単位取得退学して、あるいは博士号を取得して、まだ専任の就職口に就いていない元大学院生を雇用します。その人員配置を整理するということは、専攻の元大学院生の雇用を整理するということに直結します。代田先生がそこで見せられた彼ら彼女らに対する態度にわたしは深い感銘を受けました。相手が元大学院生であるということで、代田先生のお立場を彼ら彼女らに対する「父」と形容するならば、その態度は「慈父」にして「厳父」というひと言に集約されたからです。いいかえるなら、きわめて困難な課題を主導するお立場にあって、ある場合には元大学院生の長期的な研

究の大成を促し、見守るという慈父のごとき態度を示されつつ、別の場合には教務補佐員という立場にあるがゆえに、それに甘えて顕著な研究成果を出せないでいる彼ら彼女らに厳父のごとく接するという態度を示されました。いずれの場合も、そのような「父」としての代田先生の教務補佐員に対する態度が、彼ら彼女らの理解と共感を呼ぶところとなり、人員配置の見直しという難事を乗り切ることに通じたのであると、わたしは考えています。

ここで総務委員としての思い出を離れ、代田先生の研究上のご業績を振り返ってみましょう。いうまでもなく代田先生は、中国文学研究をベースにしながら、それを地域文化研究という領域に展開された著名な研究者であります。2011年に出版されたご著書『現代中国とモダニティ——蝙蝠のポレミック』（三重大学出版会）は、そのような地域文化研究者としての代田先生の持ち味が十二分に発揮されたご業績なのではないかと思えます。

このなかで代田先生は、反日運動が激化する中国を見据えながら、みずからの立場を「半日」と規定しておられます。そしてそれを、蝙蝠の比喩をもって説明しています。

たとえば対立する両者がいるとき、その両方から攻撃排除されることを覚悟しようという言説戦略である。鳥からも獣からも、仲間はずれになっても、鳥の悪口も獣の悪口も言い続けようという批評のスタンスである。（上掲書 14 頁）

このような言説戦略は、わたしが専門とする文化人類学にも通じるものであるように思われます。それというのも文化人類学は、自分にとって馴染みのない、馴染みのもてない心性に想像的に分け入っていくこと、そしてそれと同時に、その他なる心性がみずからの内部に浸潤することを許容すること、これによって成り立っている学問分野であるからです。いいかえるなら、自なるものと他なるものとの相互交錯と相互浸透の上に成立している学問分野であるからです。そのとき問題となるのは、蝙蝠は「鳥でもなく獣でもない」のか、それとも「鳥でもあり獣でもある」のかということでありましょう。「鳥でもなく獣でもない」から両者の中間の位置にあるというスタンスに立つとすれば、これは両義性、すなわちアンビギュイティ（どちらでもない）の問題です。これに対して、「鳥でもあり獣でもある」からそういうスタンスに立つとすれば、これは両価性、すなわちアンビヴァレンス（どちらでもある）の問題です。

わたし個人としては、これをアンビヴァレンスの問題として捉える捉え方に心惹かれています。代田先生はどのようにお考えでしょうか。他なる心性がみずからに浸潤したとき、それを許容したかぎりにおいて、みずからもその他なる心性「である」ということはできないでしょうか。馴染みの心性と他なる心性と、その両者をともに自己内部に湛えもった存在になるということはいかなるでしょうか。そうであるとするなら、自己

はすでにして自己の内部に複数性を抱えもった存在でありましょう。あえて誤読を恐れずに代田先生の表現を援用するならば、「引き裂かれた主体」となることでありましょう。

翻って話を元に戻すなら、専攻の人員配置の整理にあたっておられたときの代田先生は、明らかに「慈父であり、かつ厳父でもある」（どちらでもある）存在であられました。「慈父でもなく厳父でもない」（どちらでもない）存在ではなかったのです。この任にあたられながら、おそらく代田先生は「慈父にして厳父」というみずからの存在の複数性に「引き裂かれて」おられたのではないのでしょうか。それは、まさしくその同じ時期に代田先生が執筆しておられた「蝙蝠のポレミック」の状況そのものであったのではないのでしょうか。

このように見るとき、代田先生のなかには、専攻の運営者という行政人としてのあり方と、地域文化研究者という学問人としてのあり方とが地続きのようにつながっていることが分かります。代田智明という人格の、まさに真骨頂を見る思いです。